

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 3 日現在

機関番号：27103

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820028

研究課題名（和文）近世フランスにおけるジャンセニスムの意義と射程に関する思想史的研究

研究課題名（英文）Historical and philosophical research on the meaning of Jansenism in early modern France

研究代表者

御園 敬介 (MISONO KEISUKE)

福岡女子大学・国際文理学部・准教授

研究者番号：60586171

研究成果の概要（和文）：

「ジャンセニスム」と呼ばれる宗教事象をめぐって17世紀のフランスに起きた論争は、これまで、神学や霊性の問題として扱われ、学問的探究の対象としてどのような意味を持つかが明確ではなかった。本研究は、文献学的な探究を通して、それを西欧近世の思想史的文脈のなかに位置付けることにより、哲学と歴史学における重要なテーマとしてのジャンセニスム問題を浮かび上がらせることができた。

研究成果の概要（英文）：

The religious controversy about “Jansenism” in seventeenth-century France has been handled so far as a problem of Christian theology or spirituality. The scientific significance of this movement has not been clearly defined. Seeing it in the context of the history of ideas in early modern Europe, this research, through a philological pursuit, manages to highlight the Jansenist controversy as an important issue of History and Philosophy.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,190,000	357,000	1,547,000
2011年度	1,070,000	321,000	1,391,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,260,000	678,000	2,938,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、思想史

キーワード：ジャンセニスム

1. 研究開始当初の背景

「ジャンセニスム」は、近代ヨーロッパの社会と文化に広範な影響を及ぼした宗教問題としてしばしば言及されるが、他方で、その概念の非中立性ゆえに定義は不可能と見なされ、分析の対象とされた場合もその視角は多くの場合、神学や霊性や道徳のそれに限定されてきた。本研究課題の代表者は、本研究に先立ってジャンセニスムを一つの歴史的現象として定位しなおす試みに着手する中で、ジャンセニスム問題が西欧近代の思想史のなかに確かな地位を占めていることに気づき、それを一次文献の分析を通して論証することを目指す本研究課題を着想するに至った。

2. 研究の目的

本研究課題は、近代ヨーロッパ各国を席卷した「ジャンセニスム」をめぐって引き起こされた論争が持つ思想的意義と歴史的射程を明らかにすることで、西欧近代の社会と文化の理解に新たな知見をもたらすことを目的としている。ジャンセニスムは従来、キリスト教史の一エピソードとして扱われ、人文社会科学、とりわけ歴史学や哲学における探究の対象として明確な位置づけが与えられてこなかった。本研究は、しばしばその社会的・文化的・政治的影響力の大きさが指摘されながら正面から研究対象とされてこなかったジャンセニスム問題の学問的意義を明らかにしようとする。

3. 研究の方法

時間的にも空間的にも近代ヨーロッパ全体を覆う規模の問題であるジャンセニスムの全貌を解明し、その意義と射程を描出する

ことは、限られた研究期間内では実現困難であるため、本研究は、誘発された論争と事件が最も劇的な展開を見たフランス17世紀に焦点を絞り、それを通して、思想と歴史の両面から、ジャンセニスムという事象が提起する重要問題に一定の見通しを与えようとする。具体的には、次の二つのテーマを軸に研究が進められる。論争テキストを題材にした信の観念をめぐる哲学的研究、および、同時代の秘密結社「聖体会」とジャンセニスムの関係を探る歴史的研究である。どちらの場合も、一次文献の収集と読解を基礎とする文献学的手法が採用される。

4. 研究成果

本研究課題において設定された二つのテーマ（ジャンセニスム論争の争点としての信をめぐる哲学的研究、聖体会とジャンセニスムの関係をめぐる歴史的研究）について、得られた成果とその意義を以下、順に記す。

ジャンセニスム論争の争点の一つが信の観念をめぐる衝突、つまり「信じるとはどのような認識なのか」をめぐる意見の対立であったことは、これまで知られていなかったわけではないが、長期にわたった論争の過程で起きた様々な事件やそれらに呼応して出版された論争文書を分析しながら争点の推移を追う総合的な研究は、これまでなされてこなかった。思想面からジャンセニスム問題に迫ろうとした本研究の第一の成果は、フランス王権・ローマ教会・聖職者会議といった様々な聖俗の権力が交差する中で錯綜する展開を見せた政治的側面と、それを背景になされた様々な文書の応酬を分析することを通して、論争の争点が如何なる経緯で「信じること」をめぐる問題に収斂していったかを

明らかにしたことである。とりわけ、その過程で新たに案出された「教会的信」の観念と表現の成立の事情は、それまでフランスにおいても不明とされてきた文献の発見により、一層明確にされることになった。本研究は、さらに、こうした論争史をより広い思想史的文脈に位置付けており、これは第二の成果として指摘できる。具体的には、論争の最中に使用された「信仰分析」という言葉が、信仰の認識論的側面を哲学的に考察するという近世に特徴的な思索に固有の表現であったことを手掛かりに、ジャンセニスム論争を16世紀後半以来の「信仰分析」論者の試みに連なるものとして捉えることが可能になった。スアレスからホールデンに至るこれらの著述家の系譜は、未だ大きな探究の余地を残しているとはいえ、「何を信じるか」から「どのように信じるか」へと信をめぐる問題系が移行したことを示唆する興味深い論題であり、ジャンセニスム論争への参加者は、偶発的な仕方でも、その後継者となっていた。本研究の第三の成果として、17世紀後半のジャンセニストとプロテスタントとの論争を、先立つ「信仰分析」問題に連結するものとして把握した点が挙げられる。一般に聖体論争という別の問題枠で論じられてきたこの論争が、その方法論の点において「信仰分析」の問題を含んでおり、ジャンセニスム論争を引き継ぐ形でそれが世紀後半には主たる論点と化し（しかし対立の図式は大いに変化している）、その延長線上に「良心の自由」をめぐる議論が生まれるという一連の事情は、日本はもとよりフランスにおいても、これまで注目されてこなかった。本研究は、当初の計画を超えて、この点を重要な問題と捉えることで、信の観念をめぐる考察が近世を通じて維持されていたことを確認するに至った。

聖体会とジャンセニスム論争との関係に

ついては、信の観念をめぐる研究に比べれば、従来の知見を更新するオリジナリティーある成果をもたらすことはできなかったが、「聖体会」という17世紀フランスにおける最大の秘密結社をめぐる二次文献の収集と読解、および同会の年代記の分析を通して、これまでのジャンセニスムの歴史記述において抜け落ちていた、「聖体会と反ジャンセニスム」というテーマを浮かび上がらせることができたことが、本研究における最大の成果として挙げられる。両者の関係は、実は一筋縄ではいかない。聖体会がジャンセニスムと敵対していたことはこれまでも指摘されてきたが、この組織は1650年代の反ジャンセニスム政策の実現に、予想以上に大きな役割を果たしている。他方で、聖体会は王権にとって危険視すべき存在でもあり、1660年代にはジャンセニスム迫害と時を同じくして（これは恐らく偶然ではない）、解散に追い込まれた。こうした両義的な関係性を見ることにより、聖体会と反ジャンセニスム陣営との関係が、ジャンセニスム抑圧という時代的風潮を描出する上で極めて重要なテーマであることが理解された。

最後に、本研究課題が示唆する今後の展望について述べる。

ジャンセニスム論争を思想史的に位置づける試みは、「信仰分析」の論者の系譜を辿ることを通して、ジャンセニスム問題という特定のテーマを超えた「信の観念史」の再発見に繋がる可能性を秘めている。本研究において系譜の最初に位置付けられたイエズス会士スアレス、17世紀中葉に総合的な思索の成果を公表したソルボンヌ博士ホールデン、及びその中間期に現れた複数のトマス註解者の著作は、信の観念をめぐる哲学的思索の初期の様相を理解するうえで重要だが、未だ詳細な分析の余地を多く残している。また、

それがジャンセニスム論争にどの程度直接的な影響を与えたのかという点も、一次文献の照合を通して考察される必要がある。さらに、世紀後半のプロテスタント論争における「信仰分析」が18世紀の思想家に、ペールやフェヌロンを経由してどのように受け継がれたのかを検討することも興味深い試みである。これらの作業は、背景となる政治宗教的文脈の丹念な追跡と関係諸文書の渉獵を要するもので、実現は決して容易ではないが、近世ヨーロッパの思想史における一つの底流として存在した「信仰」をめぐる認識論を浮かび上がらせる契機となるように思われる。聖体会とジャンセニスム問題の関係も、さらなる探究の価値を有したテーマである。とりわけ、両者の敵対関係を強調しがちな通説に対して、両者の類縁関係、あるいは少なくとも抑圧者の視点から見た類縁関係を明らかにする試みは、17世紀フランスの宗教問題を総合的な観点から俯瞰することを可能にするものである。また、聖体会の活動は、信仰についての合理的理解と不可分であった道徳的・実践的側面を体現するものでもあり、信仰をめぐる二つの見方を総括する研究の可能性も、今後は視野に入れる必要があると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 御園敬介、「ジャンセニスム論争と良心の自由—「信仰分析」の問題を中心に—」、『思想』(岩波書店)、査読無、No. 1057、2012、pp. 27-43.
- ② 御園敬介、「ジャンセニスムと信仰の認識論」、『一橋大学社会科学古典資料センター年報』、査読有、No. 31、2011、pp. 39-51、<http://hdl.handle.net/10086/19037>

[学会発表] (計2件)

- ① Keisuke MISONO, 《 La polémique janséniste et l'analyse de la foi 》, *Journée d'études dix-septiémistes françaises au Japon : théâtre, poésie, philosophie, histoire des idées*, 3 novembre 2010, Université Waseda (Tokyo)
- ② 御園敬介、「ジャンセニスムと信の観念史」、一橋大学哲学・社会思想学会、2010年12月11日、一橋大学(東京都)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

御園 敬介 (MISONO KEISUKE)
福岡女子大学・国際文理学部・准教授
研究者番号：60586171

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：